

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第821号 平成26年10月20日

## 特定の価値観押しつけ？（3）

最後に申し上げたい事は、道徳教育に批判的な方々が特に問題としている、「愛国心」教育についてです。社説でも、「愛国心」教育への懸念について述べられています。

「愛国心」という言葉に対して、戦前の日本を連想して違和感を覚える人がいる事は事実だと思います。

ただ、道徳教育の中で「郷土を愛する気持ち」や「国を愛する気持ち」を養う事をおかつの国家主義教育と同列に扱い、道徳教育を否定しようとする事には賛同しかねます。

「国家主義」とは「国家を人間社会の中で第一義的に考え、その権威と意思とに絶対の優位を認める立場。全体主義的な傾向を持ち、偏狭な民族主義・国粹主義と結び付き易い（広辞苑から）」という事であり、そのような時代に逆戻りさせてならない事はいうまでもありません。だからこそ、道徳教育を必要とする側面もあると思います。

いうまでもなく、日本という国は世界の中で単独で生きている訳ではありません。多様な価値観を持つ国々と協力して初めて、日本の国の平和と繁栄が維持出来るのだという事を子ども達に教えるのも、道徳教育の役割ではないでしょうか。

「私達が生まれ育った郷土に愛着を持つ」、「日本の素晴らしさを理解し、誇りに思う」、というのは、自然な心の働きだと思います。実際に、その気になれば郷土や日本の素晴らしい点を沢山見つける事が出来るはずで、一方、「日本は悪い事をして来たダメな国だ」といったネガティブな情報しか与えられなければ、子ども達は日本人である事に誇りを感じないどころか、そんな国を少しでも良くしたいとは思わないでしょう。

中には、「社会に貢献しよう等と考えなくても良い」といった「公共の精神」を養う事に批判的な人がいない訳ではありませんが、それは「自分さえ良ければ…」と言っているのと同じではないでしょうか。そうした考え方や行動が道徳的であるはずはありません。

私は、子ども達が「社会に貢献したい」という思いを持つ事は、自分には居場所があるという確信と、自分に対する自信がなければ容易ではないと思っています。ですから、「社会に貢献しよう等と考えなくても良い」というのは、子ども達にしっ

かりとした居場所を与えなければならないという、大人の側の努力を自ら放棄するのに等しいと思います。何故なら、子ども達が自分の居場所を実感するためには、地域に生まれ、人々から愛され、必要とされるという沢山の経験の積み重ねが必要だと思うからです。

また、自分に対する自信は、自分の居場所に確信が持てないまま、つまり足元がしっかりしていないままでは、持つ事も、育てる事も難しかろうと思います。

子ども達に自分の居場所を実感させる事が出来れば、将来にわたって自信を持って生きて行けるに違いありません。

このように、「他人の役に立ちたい」「社会に貢献したい」という「公共の精神」を涵養する事は、単に社会の役にたつという事だけでなく、その人の生き方そのものにも係わる重要なものである事を、私達は自覚すべきだと思います。

私は、「愛国心」教育を否定し、「郷土」「日本」はどうなっても良い、周りの国々との関係についても関心がなく、「自分さえ良ければ良い」「自分の利益になるならやる」といった若者を作り出していく事こそ、日本をかつての悪しき「国家主義」の道に逆戻りさせていく事になるのではないかと心配になります。

道徳教育は、道徳の時間だけで行われるものではありません。道徳の教科化は、各学校が責任を持って道徳の授業を行っていく上で必要だと思いますが、道徳教育は、道徳の授業以外にも、各教科や特別活動等、学校教育活動の全てを通じて普段に行うべきものであり、そういう意味からすれば、道徳教育を否定するのではなく、その本来の役割を果たすためには如何にあるべきかを求め続けなければならないのだと思います。少なくとも、「愛国教育」を止めれば済むという問題ではありません。

(塾頭：吉田 洋一)